範囲にわたる石窟の検討が必要になる。各要素の地区間での比較研究などとともに、今後の研究の展望としたい。

エジプト先王朝時代における石材利用

―主に石製品を分析対象とした地域間の様相―

竹野内　恵太

はじめに

ナイル川下流域における先王朝時代は、続く初期王朝時代という統一国家へ向け社会が複雑化する時代である。国家形成という大きな変化は、社会文化の様々な側面を発展／変化させていった。石材資源の獲得と利用を取り巻く議論もこういった社会変化の研究に追従するものであり、主にエリートの社会的地位の向上に起因した物資のコントロールという視点から、それらを捉えている。しかしながら、そういった研究は記述レベルを越えるものではなく、具体的な研究および議論には至っていない。また、金や銅、トルコ石、ラピスラズリといった希少なものあるいは遠隔地産のものを研究対象として重要視する一方で、エジプト内部で豊富に産出する石材資源についての議論が立ち後れている。

そこで本発表では、上エジプト諸遺跡出土石製品の一つである石製容器の石材構成に焦点を当て、統計的に処理し、地域間の共時的・通時的動態を把握することにより、当該期の石材資源の利用とその諸相に光を当てることが目的である。

分析対象と方法

本発表の対象遺跡は、上エジプト地域に立地するマトマール遺跡／モスタゲッダ遺跡／バダリ遺跡／マハスナ遺跡／アムラー遺跡／ナカダ遺跡／アルマント遺跡／エルカブ遺跡、以上８遺跡である。これら諸遺跡から出土した石製容器の石材構成の遺跡間・時期的な差異を析出する。さらに、王朝時代以降の採石遺跡および採石可能地域の地理的分布を併せて考えることにより、先王朝時代の石材資源の獲得に関する知見を深めることができると思われる。

石材利用の通時的変化と地域間の石材構成の様相

上述した８遺跡出土石製容器の石材構成の変化に基づいて、時期区分が可能であることを捉えた。まずフェーズⅠ（ⅠC～ⅡA-B期）では、石灰岩やトラバーチン、玄武岩が大半を占める利用がみとめられた。続いてフェーズⅡ（ⅡC-D期）になると、石灰岩に加えて、前時期ではなかった東部砂漠由来の硬質な岩石（粘板岩・凝灰岩・）や火成岩類（角礫岩・斑岩・閃緑岩・蛇紋岩）の利用が著しく増加する。国家統一の直前期にあたるフェーズⅢ（ⅢA-B期）になると、石材構成の約８０％がトラバーチン主体になり、大きな変化をみせる。

つづいて、遺跡間の石材資源の利用差であるが、ここでもいくつかのまとまりに括ることが可能である。一つは、バダリ地域（＝マ

トマール遺跡／モスタゲッダ遺跡／バダリ遺跡）であり、当該地では全時期を通じてほぼ石灰岩とトラバーチン、玄武岩が構成主体となる。アビュドス地域（＝マハスナ遺跡／アムラー遺跡）では、基本的にバダリと同様だが、比較的東部砂漠由来の石材が多く入ってくる。つづいてナカダ地域（＝ナカダ遺跡／アルマント遺跡）は、高い割合で東部砂漠由来の石材の通時的利用がみとめられる。最後にエルカブ遺跡では、ⅢA-B期のみであるが、トラバーチン、次いで石灰岩が主体となる。

王朝時代以降の諸採石地からの類推

8遺跡は基本的に近郊で獲得できる石材を利用しており、ワディ・ハンママートという巨大なワディ（涸れ谷）から遠のくにつれ、各遺跡では東部砂漠由来の石材が減少する。ワディ・ハンママートに近接するナカダ遺跡における東部砂漠由来の石材の圧倒的保有率を勘案すると、ナカダ地域は、このワディを介する経路によって東部砂漠へ容易にアクセスすることが可能であったことを明示しているだろう。また、トラバーチンの採石地が中エジプト地域にほぼ限定することは、ⅢA-B期で石材供給地の限定化・ワディを介さずとも採石地へアクセスできる＝物資の流動化といった現象が指摘できる。

結論

以上の分析結果を得ることができたが、際立った傾向は以下にまとめることができる。1)ⅡC-D期における石材の多様化と特定地域（ナカダ地域）への集中、2)ⅢA-B期のトラバーチンの集約化と石材供給地の限定化・物資の流動化である。1)については、ナカダ遺跡は地理的な優位性から東部砂漠で豊富に産出する石材資源へのアクセス権を有しており、ⅡC-D期において各地域間の競争関係が著しく激しさを増す状況下で、当遺跡を支えた経済的戦略の一つとして働いた可能性が指摘できる。2)に関して、国家統一の直前にあたる時期にある特定の石材にその利用が集約化したことは重要であり、国家社会へと社会レベルが進展する動きと連関性があると考えられる。

今回の分析は、石材資源の動態を国家形成という枠組みの中で捉えるべき現象であることの傍証となる可能性を示しているだろう。

デール・アル＝マディーナにおけるシャブティの生産体制

熊崎　真司

一、はじめに

シャブティは、来世において死者の労役や食物生産を代行する人型の小像である。シャブティは主に副葬品として用いられたが、その質には、個体間でバラつきが存在した。本発表では、こうした質のバラつきを生じる要素として、シャブティの生産体制に注目、要